コモンルームだより

山本小百合・奥田増栄

私達が働く研究部受付、通称「コモンルーム」は一言で言えば、研究者の皆様が交流される場です。日文研エントランスをまっすぐに進んだ研究棟の入り口にあり、広いスペースで開放感たっぷりのサロンのような空間です。そしてその空間を一度に見渡せる位置に受付カウンターが配置されています。中庭に面しているため、眺めも良く、自然の豊かさを感じられる快適な環境です。過去に何度か鳥が迷いこんできたこともありました。猿や鹿を見かけることもあります。中庭の木々や草花が四季折々の表情を見せてくれますので、その美しい庭に心が癒され、励ましや力を与えられる毎日です。もちろん、来訪者の方々にも大変好評です。

私達受付の仕事は朝八時半から始まります。まずは、窓を開けて空気の入れ換えをします。その後お湯を沸かし、珈琲を作り、簡単な清掃や新聞の仕分け等をしたら、皆様をお迎えする準備も完了です。コモンルームの朝一番のさわやかな空気が好き、と言われることもあります。庭から聞こえてくる鳥の鳴き声や充満した珈琲の良い香りのおかげなのかもしれません。またコモンルームの珈琲が美味しい、と度々言っていただくことがあるのですが、実はもう何十年も同じコーヒーメーカーを使用しています。お褒めいただけるのは、こちらのとても優秀な機械のおかげです。もう手放せません。

一人また一人と先生方が来所され、受付カウンターで研究

室の鍵を渡し、連絡事項があればその際にお伝えします。先生方はお忙しい方ばかりなので、このタイミングを逃すと後にお話しすることが難しいこともあり、やはりこの時がベストです。そしてその合間に先生方や職員からの問い合わせの対応をします。その他、郵便の仕分け作業、電話対応や来客対応もあります。コモンルームにはソファとテーブルのセットが並んでいて、打ち合わせ、歓談、意見交換や取材等に利用されます。また受付近くにはファックスやコピー機などの設備も揃っています。忙しい日にはそれらがフル稼働し、普段は比較的静かなコモンルームもとても賑やかになります。疲れを感じた時やちょっとした休憩をしたい時にも最適な場所となっていますので、珈琲を飲みながらご歓談される先生方も多くいらっしゃいます。

来客の際には、先生方の取材等の光景も伺えます。丁寧にそして熱心に対応されている姿を拝見して、日文研スタッフであることを誇らしく感じたりします。時には写真撮影もあり、後日新聞等でその時のものと思われる写真を拝見することもあります。「ああ、あの時の写真だな」と感じることができ、なかなか興味深いです。先生方はさすがプロ、とっても自然体の良い写真に仕上がっています。

学生さんをご指導される光景を目にすることもあります。指導する方もされる方も真剣そのもので、時には厳しい言葉も聞こえてきます。この時は穏やかな空気が一転、張り詰めた空気が漂い、私達もこれが指導というものだと垣間見る瞬間です。

そんな忙しい日常の合間に先生方が私達にお声をかけて下さることもあります。研究のお話をお聞きする絶好の機会です。皆さんそれぞれご専門が違うこともあり、お話しして下さる内容も多岐にわたります。

研究部には外国人研究者の方々もたくさんいらっしゃいます。お国は様々、国際色豊かです。文化の違いや日本独特の習慣等についてのお話をお聞きすることもでき、勉強になります。コモンルームでは様々な言語が飛び交う場所でもあります。英語はもちろん中国語や韓国語、その他にもベトナム語やオランダ語等、普段あまり耳にすることのない外国語だったりもします。日本にいながら世界を感じられ、本当に贅沢な空間だと感じています。国境を越えてご歓談され、笑顔が溢れる時、私達もホッとします。このような和やかな時間は、研究者の先生方にとっても貴重な時間のように見受けられます。この歓談の時間も含め、全てが研究の糧となられ

ているのではないでしょうか。

以上、簡単にコモンルームの日常をご紹介しましたが、個性豊かな先生方の中ではなかなかユニークな出来事もたくさん起こります。毎日のルーティーンの仕事以外にも臨機応変な対応を求められることもあり、勉強の日々です。このような素晴らしい環境、そして様々な分野でご活躍されている先生方の研究を間近に感じることができ、たいへん光栄です。ですから私たちも感謝の気持ちをもって、穏やかで暖かみのある雰囲気作りを心がけ、日々務めるようにしております。そして皆様をお迎えする時には、全ての思いを込めてご挨拶したいと思っています。「おはようございます」、「こんにちは」。

木曜セミナーから学ぶ

堀　まどか

二〇〇三年春以来、総研大の院生、そして機関研究員として、「木曜セミナー」を拝聴してきた立場だった私は、今回初めてそこへ自ら登壇する機会を得た。今回学んだ点を簡単に記しておきたい。

第一九五回木曜セミナー「二〇世紀初頭の俳句・能の海外発信――『二重国籍』詩人・野口米次郎のもたらしたもの」

コメンテイター：三原芳秋同志社大学准教授

開催日：二〇一三年二月二一日

場所：日文研セミナー室1

（一―一）コメンテイター（外部の研究者）とのセッション

当初は自分の報告だけを依頼されたが、この機を生かしてかねてから敬意を抱いていた研究者（三原芳秋氏）にコメンテイターとして来てもらうように交渉してみた。日本文学研究から比較文学研究に研究途中で移項した私は、理論面や議論技術が極めて弱いことを自覚している。氏は英米モダニズム文学およびポストコロニアルの批評理論が専門で、かつ私がこれから足を踏み入れようとしている植民地朝鮮の事象にも詳しいので、理論や東アジアでの理解の問題という自分に欠けている点を指摘してもらって、これからの課題を明確化したいと考えた。日文研の先生方からはこれまで多大な御教